

Title	序
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.5, 1994.3 : 3-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2977
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

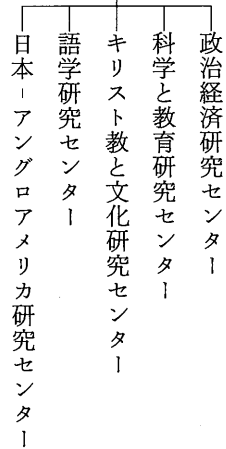
序

『紀要』第5号、第I部には、本研究所の三年にわたる特別研究プロジェクト「デモクラシーの研究」の一九九三年度の研究発表表が掲載されている。一方ではデモクラシーの思想的源流にさかのぼり、他方では現代の中国や北朝鮮の状況をデモクラシーの視点から分析するという、本研究所の問題意識を典型的に表すような成果である。鐸木氏は、北朝鮮の研究者として外務省の注目するところとなり、現在北京の日本大使館で研究活動を続けている。

第II部の保谷教授の「チャールズ・E・ガルスとその時代」は、一九九三年が聖学院の背景をなすアメリカ・デイスアイプルス派宣教開始一〇〇周年にあたり、その最初の宣教師であり日本社会運動史にその名を残したガルスについて述べられたもので、よい記念となる評伝的論考である。英文の諸論文は、上記「デモクラシーの研究」と並行して行なわれた語学研究センターの研究プロジェクト（これは日本私学振興財団の「特色ある教育研究」として助成対象となつた）の諸発表表である。

語学研究センターは、聖学院大学総合研究所の下部研究組織の一つであり、この研究センターに最近さまざま活発な語学教育活動を続けているランゲージ・インスティテュートが付設されている。この機会に総合研究所の下部研究組織について紹介すれば左記のようである。

聖学院大学総合研究所



最後の英文論文の著者ハウズ氏は、ケンブリッジ大学のトリニティ・ホール（ケンブリッジ最古のコレジのひとつ）のフェローで、一九九五年の九月にまた来日されることになっている。同氏は、日本・アングロアメリカ研究センターの研究推進に協力されることになろう。この研究センターの発展は、聖学院大学・女子聖学院短期大学にとってのみならず、日本にとっても意味あるものとなると思っている。

一九九三年三月

所長 大木英夫